

接続助詞「が」の提題用法について

亀田千里

0. はじめに

接続助詞「が」は一般的に逆接の接続助詞と呼ばれることが多い。しかしその一方で、「が」が逆接以外の用法を持つことも指摘されている。本稿ではその接続助詞「が」の用法のうち提題用法と呼べるものを取り上げ、その性格を明らかにする¹⁾。

1. 問題の所在

接続助詞「が」の用法の中には、次のようなものがある。

- (1) 太郎は白いカローラに乗っているが、それは次郎から買ったものだ。
- (2) 昨日××県の県知事が選挙違反で書類送検されたが、警察の調べによると10年前にもやはり選挙違反を犯していた疑いがもたれている。
この用法について、先行研究では次のような説明がなされている。

◇国研 (1951)

- ・題目、場面などを持ち出し、その題目についての、またはその場合における事からの叙述に接続する²⁾。
- (3) こうした態度は今なお日本人の間につよく残っているが、このメンタリティはインテリにおいては、思想の純粋性ないし観念性への好みと密接に結びついている。
- (4) ニューヨーク市長の選挙は、民主党オドワイヤー現市長、共和党＝自由党モリス、米国労働党マーカントニオ三者で争ったが、オドワイヤー市長がモリスを30万票引き離して再選した。

◇森田 (1980)

- ・全く関係ない叙述を繋げる。前置きから次の話題へと話を展開させる³⁾。
- (5) 彼とは初対面だが、なかなかしっくりした青年だ

これをまとめると、(1)～(5)では、「が」の前件である事態が示され、それに関する何らかの叙述が後件で行われているといえる。そこで接続助詞「が」のこのような用法を、接続助詞「が」の提題用法と呼ぶことにする。

だが管見の限り、先行研究ではこの用法についてのくわしい記述は見あたらない。そこで以下ではこの接続助詞「が」の提題用法がどんなものであるか考察し、その性格を

明らかにする。

2. 接続助詞「が」の提題用法にみられる2つのタイプ

提題用法の「が」複文⁴⁾の前件と後件の関係のあり方には、次の2つのタイプが見られる。

- ・後件が、前件の一構成要素に関する叙述であるもの (タイプ1)
- ・後件が、前件で提示した事態そのものに関する叙述であるもの (タイプ2)

2.1 後件が、前件の一構成要素に関する叙述であるもの (タイプ1)

このタイプは、前件で提示した事態の一部分に関して、後件で何らかの叙述を行っているものである。次の例を見られたい。

- (6) 太郎は白いカローラに乗っているが、それはとても古い。
- (7) 一方給与の方は、毎年、前年の物価上昇率に応じて引き上げているが、今年4月からは去年の上昇分、0.7%引き上げることとした。(朝)
- (8) 小高良郎氏は、「私はいかにして課長になったか」という著作を持っているが、あいにくその処女作は、僚友大山隆雄氏の「部長になるにはコレをしる」の発売直後に発行されたため、あまり芳しい売れ行きをみせなかった。(アパ/夢 p.16)

例えば(6)では、前件の「太郎は白いカローラに乗っている」という事態の一構成要素である「(太郎の乗っている白い)カローラ」に対して、後件で「それはとても古い。」という叙述を行っている。このことは、次のように前件が後件に組み込めることによっても確かめられる。

- (6)' (太郎が乗っている白い)カローラ はとても古い。
- (7) (8)の前件と後件においても同様に、次のような意味関係が認められる。
- (7)' (毎年、前年の物価上昇率に応じて引き上げている)給与の方 は、今年4月からは去年の上昇分、0.7%引き上げることとした。
- (8)' (小高良郎氏の持っている「私はいかにして課長になったか」という)著作 は、僚友大山隆雄氏の「部長になるにはコレをしる」の発売直後に発行されたため…

2.2 後件が、前件で提示した事態そのものに関する叙述であるもの (タイプ2)

次に示すのはタイプ1とは異なり、前件で提示した事態そのものに関して後件で何らかの叙述を行っているタイプである。次の例を見られたい。

- (9) 去年、インドを旅行したが、非常に面白かった。(今尾 (1994) の例)
- (10) 花子は太郎とつきあっているが、それは僕だけが知っている。

例えば(9)では、前件の「去年、インドを旅行した」という事柄全体に対して、後件の「非常に面白かった」という叙述がなされている。これは、以下のように前件を後件に組み込んだ場合、前件が「コト」によって名詞化されることによって確かめられる。

- (9)〔去年、インドを旅行した〕コトハ非常に面白かった。

(10)においても同様に、前件と後件との間に次のような関係が認められる。

(10)〔花子が太郎とつきあっている〕コトは僕だけが知っている。

2.3 タイプ1とタイプ2に共通するもの

2.1、2.2で見たように、提題用法の「が」複文の前件と後件の関係のあり方には、2つのタイプがある。1つは後件が前件の事態の一構成要素に関わる叙述になっているもの(タイプ1)であり、もう1つは後件が前件の事態そのものに関わる叙述になっているもの(タイプ2)である。ただし一見異なって見えるこの両者には、共通点がある。すなわち、厳密にいうとタイプ1における後件の叙述も「が」の前件で提示した内容すべてに関わっているのであり、その点においてタイプ2と同質なのである。

例えば(6)における後件の「それはとても古い」という叙述は、前件内の「カローラ」に対して行われているわけだが、厳密に言えばその「カローラ」はカローラ一般ではなく、「太郎が乗っている白い」カローラのことを指している。

(6) 太郎は白いカローラに乗っているが、それはとても古い。

(6)〔太郎が乗っている白いカローラ〕はとても古い。

つまりタイプ1において、後件の叙述の係り先である前件の「一構成要素」とは、あくまで前件で提示された事態内の、いわば“限定された”要素なのである。

このようにタイプ1とタイプ2の提題用法の共通点が見いだされたことで、「が」複文の提題用法の「前件である事態を提示し後件でそれに関する叙述を行っている」という性格が改めて確認できよう。

3. 提題用法の接続助詞「が」と主題の「は」

3.1 提題用法の接続助詞「が」と主題の「は」の類似点

さて、2でも確認されたように、提題用法の「が」複文は、前件である事態を提示し、それに関する何らかの叙述を後件で行っているものである。つまり「が」の前件と後件とが提題-叙述という関係になっている。

そこで思い出されるのは、「は」である。主題の「は」は「提題助詞」(益岡・田窪(1992))とも呼ばれ、先行研究では例えば次のような説明がなされている。

- ・主題(文の陳述の対象)を提示する。(益岡・田窪(1992))
- ・題目を提示し、叙述の範囲を設定する。(国研(1951))
- ・その統括するものを、それに続く叙述の前提として話の場に提示し、叙述の範囲をそれに限定する(佐治(1991))

これを踏まえて考えると、確かに「は」は名詞句を、接続助詞「が」は事態を提示しているという違いはあるものの、接続助詞「が」もある事態を提示しそれ以降の叙述の範囲を設定しているという点では「は」と同質であるように思われる。

では、本当に提題用法の接続助詞「が」は「は」と同じ働きを持つと言えるのだろうか。

3.2 提題用法の接続助詞「が」と主題の「は」の相違点

3.2.1 「は」と旧情報

野田 (1996) によると、主題の「は」に関しては、「旧情報をマークする」「判断文で用いられる」「指定文で用いられる」など格助詞「が」との違いにおいて様々な説明が試みられている。

だが、そこで明らかになった「は」の性格がすべて接続助詞「が」の提題用法に当てはまるわけではない。以下ではこのうち「旧情報」説、すなわち「は」を伴う名詞句が既知の情報（旧情報）を表しそれに続く叙述の部分が未知の情報（新情報）を表す、という説（久野 (1973) (1978)、井上 (1979) など）を取り上げて、それが接続助詞「が」にも当てはまるかどうか考察する⁵⁾。

3.2.2 「が」複文の前件内の要素の性質

「は」でマークされるのは、名詞句である。それに対して接続助詞「が」でマークされるのは、名詞句と動詞句を含んだ、限りなく文に近い性格を持つ節である。よって「が」複文の前件の性質（旧情報か否か）を判断するには、まずその中の個々の要素の性質を観察し、それから前件全体の性質を見る必要がある。

初めに前件内の個々の要素の性質を見てみると、「が」複文の前件が既に旧情報を含んでいる場合と、そうでない場合がある。

まず(11)において、「が」複文の前件中の名詞句「通信文」は、それ以前の文脈から、聞き手が既に知っている情報、すなわち旧情報であると判断できる。また(12)における「が」複文の前件でも、名詞句「その写真」は、前方照応の指示詞がでていることからやはり旧情報であるといえる。

(11) そんなある日のこと、地球に大事件がもちあがった。宇宙のかなたから、一機の巨大な円盤が太陽系に飛来し、月と地球のちょうど中間の宇宙空間に停止して、地球に通信連絡を送ってきたのだ。通信文は、ただちにコンピュータによって解読されたが、それを読んだ人々は、腰をぬかさんばかりにおどろいた。

(悲/p.19)

(12) たどんの目は、炭素の究極の目標であるダイヤモンドにあと一步というところにまで近づき、透明感のある深く黒々とした光を放っている。その写真に、白ヌキの英文が「SEE YOU AGAIN」と印刷されているのだが、これは日本語の「めいぶくをいのる」の意識として考えられたものだという。名訳とは言い難い。

(スベ/夢 p.112)

一方(13)(14)は文章の冒頭に現れた文であり、前件中には「は」も指示詞も現れていない。つまり(13)(14)の前件には旧情報が含まれておらず、すべて新情報であるということになる。

(13) 自動車やジェット機との対抗上、JR グループ各社で軌道式列車の最高速度を引き上げる試みが相次いでいるが、グループの中核である JR 東日本は、スピード競争を一気にリードする狙いで、超高速型の試作車を造り、西独 ICE (インターシティ試

験列車)が持つ時速406キロの世界記録を抜く410キロ上の新記録に挑むことになった。(朝)

- (14) 7日夕、吹上御所1階の居間に設けられた「しん殿(しんでん)」で一般の通夜に当たる祓候(しこう)が営まれたが、亡くなられた陛下のご遺体は白一色に包まれて「昭和」最後の夜を過ごされた。(朝)

3.2.3 「が」複文の前件全体の性質

3.2.2の観察を踏まえた上で、今度は「が」複文の前件全体の性質について考察する。

まず(13)(14)だが、これらの前件には旧情報が含まれていないので、前件全体が新情報になっているといえる。一方(11)(12)は前件に旧情報が含まれているが、前件中の述部の部分¹⁾は新情報であることから、前件全体としては新情報だといえよう。

だが(15)のように、前件全体が旧情報であると解釈できる場合もある。

- (15) 先日もお伝えしましたように、昨夜都内のホテルで大きな火災がありました²⁾が、その後の調べで原因は宿泊客の寝タバコと判明しました。

(15)は「先日もお伝えしましたように」という節の存在から、前件の「昨夜都内のホテルで大きな火災があった」という情報が旧情報として扱われていると解釈できる。

以上のことから、提題用法の接続助詞「が」は、「は」とは異なり、新情報でも旧情報でもマークできるのだといえる。

4. 提題用法の接続助詞「が」の性格

3で見てきたように、提題用法の接続助詞「が」は、「何かを提示しそれについての叙述を後に導く」という点では主題の「は」と似ているが、その提題のあり方は「は」とは異なる。この異同をまとめると、提題用法の接続助詞「が」は、ある情報を、それが相手にとって旧情報であるか新情報であるかに関わらず、それ以降の叙述のために提示しているのだといえる。

提題用法の接続助詞「が」の性格を更に明らかにするために、ここでは「が」複文と連文とを比較してみよう。(16)(17)を見られたい。

- (16) 昨夜茨城県南部で大きな地震がありました。震源地は××付近と見られます。

- (17) 昨夜茨城県南部で大きな地震がありました³⁾が、震源地は××付近と見られます。

「昨夜茨城県南部で大きな地震があった」という情報が既に報じられている場合、通常(16)は用いられない。このことから、(16)のように表現される時、第1文の「昨夜茨城県南部で大きな地震があった」という情報と第2文の「震源地は××付近と見られる」という情報は、どちらも聞き手の知らない情報(すなわち新情報)であり、話し手にとって同じ重みを持っているといえる。

一方(17)は、前件が既に報じられている情報(旧情報)の時にも、新たに提示される情報(新情報)の時にも用いられる。まず前者の場合を考えると、一般に旧情報は新情報よりも話し手にとっての重要度が低いのに、どうして話し手は旧情報をわざわざ提

示するのだろうか。この理由としては、前件の情報が後件を述べるための前段階として必要だからである、ということが考えられる。

では、(17)の前件が新情報を示している場合はどうだろうか。(16)と比較すると、同じ新情報であるとはいえ、この場合の(17)の前件と(16)の第1文とは性格が異なっている。すなわち先程の考察((17)の前件が旧情報の場合)も踏まえると、この場合の(17)の前件も、後件の情報に比べて重みが軽く、後件の情報を伝えるための前段階にすぎないのだと考えられる。

以上のことから、提題用法の接続助詞「が」は、ある情報(後件)を導くための前段階として、なんらかの情報(前件)を提示しているといえよう。

5. 「が」複文における、前件から後件への叙述のなされ方

4において、提題用法の接続助詞「が」が聞き手に対してなんらかの情報を提示すること、そしてその情報が、「が」の後に続く叙述(後件)を聞き手に導入するための前段階となっていることを述べた。それを踏まえて、もう一度提題用法の「が」複文の前件と後件の関係を観察してみよう。

(6) 太郎は白いカローラに乗っているが、それはとても古い。

(7) 一方給与の方は、毎年、前年の物価上昇率に応じて引き上げているが、今年4月からは去年の上昇分、0.7%引き上げることとした。

(8) 小高良郎氏は、「私はいかにして課長になったか」という著作を持っているが、あいにくその処女作は、僚友大山隆雄氏の「部長になるにはコレをしろ」の発売直後に発行されたため、あまり芳しい売れ行きをみせなかった。

(9) 去年、インドを旅行したが、非常に面白かった。

(10) 花子は太郎とつきあっているが、それは僕だけが知っている。

(6)(8)(10)の例文を見ると、後件に「それ」「その」といった文脈照応の代名詞表現が現れて前件の内容を指示しており、更にそれが「は」で主題化されている。また後件に文脈照応の代名詞表現の現れていない(7)(9)に関しても、後件の初めに「それは」を補って考えることができる。

つまり提題用法の「が」複文では、「が」によってある事態がいったん聞き手に提示され、それを後件で文脈照応の代名詞表現で受けることによって、後件の叙述が続いているのである。

ところでここから、提題用法の「が」複文の前件と後件の関係が提題—叙述になっているのは実は後件で現れている代名詞表現が「は」によって主題化されていることから生じているのではないか、すなわち単に後件の「は」の問題なのではないか、という疑問が生じる。

だが、提題用法の「が」複文の後件に現れる代名詞表現は、必ずしも常に「は」で主題化されているわけではない。

(11) そんなある日のこと、地球に大事件がもちあがった。宇宙のかなたから、一機の

巨大な円盤が太陽系に飛来し、月と地球のちょうど中間の宇宙空間に停止して、地球に通信連絡を送ってきたのだ。通信文は、ただちにコンピュータによって解読されたが、それを読んだ人々は、腰をぬかさんばかりにおどろいた。(悲/p.19)

(18) 最近、近松門左衛門の心中物をいくつか読んだのだが、そこに登場する女郎たちに娘との共通点を見だし驚いた。(愛/p.73)

(19) クジラはうまい。大好物です。私は、毎日、クジラもイルカもチクワも食しておりますが、それがどうかなさいましたか。(ホエ/夢 p.185)

(11) ただちにコンピュータによって解読された通信文を読んだ人々は、腰をぬかさんばかりにおどろいた。

(18) 最近いくつか読んだ近松門左衛門の心中物に登場する女郎たちに娘との共通点を見だし驚いた。

(19) [私が毎日クジラもイルカもチクワも食しておく]コトがどうかなさいましたか。

(11)(18)(19)は(11)'(18)'(19)'のように、後件が前件の事態に関する叙述にはなっているものの、後件の「それ」「そこ」が「は」で主題化されているわけではない。

つまり「が」複文の前件で導入され後件の代名詞表現で指示されている事態は、後件で主題化されやすい傾向にあるとはいえ、たとえそれが後件で主題化されていなくても、前件と後件との間に提題－叙述の関係は保たれているのである。

ただ、「が」によってある事態を聞き手にいったん導入することで、その情報は聞き手にとって既知の情報となる。そのため後件でその内容を「は」で受けやすくなるのだといえよう。

6. まとめ

本稿では、提題用法の接続助詞「が」について考察した。そしてそれが「後件である叙述をするための前段階として、ある事態を聞き手に対して提示し導入する」という機能を持つことを明らかにした。

この提題用法の接続助詞「が」の「提示し導入する」という機能は、「が」の他の用法との関連からも支持されるものと思われる。

例えば接続助詞「が」の提題以外の用法として、次のような例がある。

(20) 昨日は雨が降っていたが、洗濯をした。

(21) 太郎は先週東京へ行ったが、次郎は大阪へ行った。

(22) お気の毒ですが、この洗濯機はもう直りませんよ。

(23) もしもし、山田ですが。

先行研究(国研(1951)、横林・下村(1988)、森田(1980)など)では、(20)は逆接、(21)は対比、(22)は前置き、(23)は言いさしと呼ばれ区別されている。

これらは一見異なった用法であるように感じられる。しかし「が」によって何らかの

事態が「提示し導入されている」という点においては、共通している。くわしくは別稿に譲るものの、接続助詞「が」が本来どのような性格を持つのか、ということを考えたときに、この概念はかなり有効であると思われる⁹⁾。

接続助詞「が」の用法は、様々である。その中で本稿で論じた「提題用法」は、恐らく数ある接続助詞の中で「が」と「けれど(も)」だけがもつ用法であると思われる。(その他の用法に関しては、状況に応じて使い分けられているとはいえ、例えば逆接には「のに」「ても」、対比には「し」、前置きには「て」「し」、言いさしには「から」「のに」などの接続助詞も用いられる。) そのことから、接続助詞「が」の提題用法を考察することは「が」がそもそもどういう接続助詞なのか、ということを考える上での重要な手がかりとなるといえよう。

【注】

- 1) 接続助詞の「けれど(も)」も「が」と同じような用法を持つと思われる。しかし文体差以外の両者の差については、先行研究でも明らかではない。よって本稿では「が」のみを扱うことにする。「けれど(も)」に関しては、稿を改めて考察したい。
- 2) なお国研(1951)では「・・・そのほか数々の前置きを表現するに用いる。」として、この用法の中に次のような例も含めている。
・しかしながら、私はいつも感じているのであるが、彼の golfs の町での行為は、後世の著作家たちが評価するほどに見事な手際ではなかったのではないか。
しかしこのように前件が後件に対する話者の発話行為を表し副詞的になっているものは、本稿で扱う「提題用法」に含めない。
- 3) 森田(1980)の接続助詞「が」の項には意味や用法の記述が無く、「けれど」の項を参照するようにと指示されている。そして「けれど」の項で、「が」は書き言葉的であり「けれど」は話し言葉的であると説明されている。ここから、森田は「が」と「けれど」が書き言葉的か話し言葉的かの違いを除けば同じものだと考えていると思われる。それは、森田の挙げる例に、「が」の用いられている例と「けれど」の用いられている例とが混在している所からも窺える。
- 4) 接続助詞「が」の用いられている複文のことを、以下では“「が」複文”と呼ぶ。
- 5) なお旧情報、新情報という概念に関しては諸説あるが、ここでは久野(1973)(1978)、井上(1979)の定義に従う。
- 6) ただし筆者は、提題の機能イコール接続助詞「が」の本質だ、と考えているわけではない。本稿で示した「が」の機能はあくまでも接続助詞「が」の持つ本来の性格から導き出される機能の1つであると考えている。

【参考文献】

- 井上和子(1979)「旧い情報・新しい情報」『月刊言語』8-10 大修館書店
- 今尾ゆき子(1994)「条件表現各論—ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ—談話語用論からの考察—」『日本語学』vol.13 8月号 明治書院
- 上林洋二(1988)「指定文と指定文—ハとガの一面—」『文藝言語研究 言語篇』14 筑波大学芸文・言語学系
- 菊池康人(1995)「「は」構文の概観」益岡隆志他編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 北原保雄(1984)『日本語文法の焦点』教育出版株式会社
- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店

小出慶一 (1984) 「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』

7

国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版

佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房

仁田義雄編 (1995) 『複文の研究 (上) (下)』くろしお出版

野田春美 (1995) 「ガとノダガー前置きの表現－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版

野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版

益岡隆志・野田尚史・沼田善子編 (1995) 『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店

南不二男 (1994) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』角川書店

森田良行 (1995) 『日本語の視点』創拓社

横林宙世・下村彰子 (1988) 『接続の表現』荒竹出版

【用例出典】(本文中の例文のうち、出典が明示されていないものはすべて作例である。)

朝日新聞1989年1月号 (朝)

柴門ふみ『愛こそがすべて』角川文庫 1993 (愛)

村上春樹・糸井重里『夢で会いましょう』講談社文庫 1986 (夢)

糸井重里「アパート」(アバ)

「スペシャル・イシュー」(スベ)

「ホエール」(ホエ)

横田順彌『悲しきカンガルー』新潮文庫 1986 (悲)

【付記】

本稿は筑波大学国語国文学会第20回大会 (平成8年9月14日) での研究発表を修正・補筆したものです。席上ならびに発表後、多くの方々より有益なご教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

(かめだ ちさと 筑波大学大学院 博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)